

【論文】

## 1910年代の日韓文学の交点

—〈白樺〉・〈青鞜〉と羅蕙錫<sup>ナ・ヘソク</sup>—

江 種 満 子

The Encounter Between Japanese and Korean Literature in  
the late Meiji and early Taisho Era: *Shirakaba* (White Birch),  
*Seito* (Bluestockings), and Na Hesok

EGUSA, Mitsuko

要旨：1914年に朝鮮から留学したナ・ヘソク（羅蕙錫）のエッセイと小説を通して、1910年代の日韓の政治状況及び文化状況の交点に照明を当てる。1910年代は、明治国家主義を推進した明治第一世代に抗して、個人の価値に立脚して世界をとらえようとする第二世代の言説、すなわち〈白樺〉・〈青鞜〉・アナキズム等の個人主義の思想が主流化する。その中で、有島武郎は白樺派としては異例の存在として、インターナショナルな視点をアメリカ留学と社会主義の研究によって獲得し、1910年の韓国併合に至るまでの日本の朝鮮・韓国支配に対して鋭い国家批判を抱懐していた。有島に比べると、一見、インターナショナルな視点をもたなかったかに見える白樺派の武者小路実篤や志賀直哉たちだが、実際には、彼らは明治第一世代がとらわれた国家意識や国民意識を離れ、国家と個人の関係を革命的に逆転させる仕事をした。ナ・ヘソクの自己形成は、このような第二世代の言説が燃え上がる時期に留学したことを抜きにしては、考えられない。とりわけ〈青鞜〉の平塚らいてうが描いた「太陽」の表象が、彼女をインスパイアした。

キーワード：1910年代、朝鮮、白樺、青鞜、羅蕙錫、結婚

## はじめに

2006年8月22日、韓国日本近代文学会の夏期特別企画—韓日共同〈白樺派〉文学研究シンポジウム・「白樺派と韓国」—が、韓国外語大学で開催された。この日、韓国・日本の日本近代文学研究者は、白樺派と韓国の文化的交渉について、初めて同じ場で討議する機会を得た。

この企画は、有島武郎研究会に所属する日韓の会員の私的な話し合いの中で、日本の白樺派研究者も韓国日本近代文学会の夏期研究会に参加してみようという声が上がったのを受けて、韓国日本近代文学会での検討が重ねられるうち、漸次国際的な学会へと形が整えられたものである。

当日の学会は、崔在喆学会長をはじめ、韓国側からは金春美、王泰雄、金希貞、申寅燮、申智淑、黄奉模、許昊、朴美那の諸氏をはじめ、多くの研究者が韓国各地から参加され、他に日本の韓国文学研究者の波田野節子氏なども出席された。プログラムは、5本の研究発表（討論者付）と一本の講演、それらを総括する総合討論で構成され、長時間にわたって有益な意見交換がなされた。

また、筆者のように韓国語に不案内なものが多い日本側参加者への配慮から、学会は終始日本語で進められたので、私たちは韓国・日本の最新の研究状況を知ることができたばかりでなく、両国の相互理解を深めるうえで更なる一歩を印すことができた。

このように貴重な機会が韓国日本近代文学会によって用意されたことを、ここで改めて感謝申し上げる。

本稿は、この夏期特別企画の一部として筆者がおこなった講演「1910年代の韓日文学—白樺派・青鞜・羅蕙錫—」にもとづきながら、タイトル・構成ともに大幅に改めて論文化したものである。

## 1 1910年代の日本と女子留学生羅蕙錫

私は日本近代文学の一研究者として、有島武郎をはじめとする〈白樺派〉や〈青鞥〉グループと長くつき合ってきた。ここ10年以上は、〈ジェンダー〉の視点を生かしてそれらのテキストを読み直すことを研究方法の中心においている。ジェンダーは、学問としてもインターナショナルなテーマなので、私の研究も少しは日本を超えて理解される可能性があるだろう、と密かに恃む所がないわけではなかった。ところが今回、〈白樺派〉と〈青鞥〉グループが活躍した1910年代について、それらと深く関わった韓国の近代文学を視野に入れ、相互の交渉を考えてみようと思い立ったとたん、否応もなく日本のナショナリズムの問題を避けては通れないことを痛感した。ジェンダーだけでは超えられそうにない壁にぶつかったのである。これまで日本の内部からだけ見慣れていた白樺や青鞥の世界が別の相貌を見せるようになり、私は研究者としての初心に立ち返らざるを得なかった。

そこで、この問題に対してさしあたり決めたアプローチは次のようなものである。具体的には、主として〈白樺派〉の有島武郎と武者小路実篤、そしてその白樺派とごく近い関係にあった〈青鞥〉の平塚らいてうによって日本の状況を代表させ、他方、そのような日本の文学・文化の磁場へ朝鮮から参入してきた弱冠18歳の女子留学生ナ・ヘソク（羅蕙錫1896-1948）を朝鮮文学の担い手の代表として対置する。そこから、朝鮮の留学生が1910年代の日本の文学・文化とどのように接し、かつそれをどのように自身のために摂取したのか、二つの国の文化の交点の具体的な実相を照射してみる、というものである。

1910年前後になると、日本では明治国家を草創した初代明治人の精神に距離をおく明治第二世代が育っており、初代明治人への批評を込めた新しい言説を勢いよく語り始めた。その代表的存在は白樺派と青鞥グループである。かたや、明治初代以来の日本帝国主義によって植民地化され、つい

に1910年に強占された朝鮮からは、日本の国家主義に対する批判と抵抗を抱いた若者たちが、自らの敵を知るためにあえて敵の腹中に入るのにちかひ精神をもって、同時にまた、近代化を先行させた日本文化にふれたいという欲求も伴って、多数留学して来た。その数は1915年頃では当該年度だけで、留学者総数500人を超すまでになったという<sup>(1)</sup>。

彼らは日本に来て、国家や社会よりも個人先行の人間観を基盤にして世界と自己との関係を作り上げようとする日本の第二世代に出会う。そして、第二世代が投げかける旧世代への批評的な視線を、彼ら留学生自身が日本の帝国主義に対する抵抗の精神を励起する追い風、と受け止めたのである。

ナ・ヘソクはそのような留学生の代表的存在だった。彼女は1914年から1918年まで東京私立女子美術学校で西洋画を学ぶ。同時に、1910年の韓国併合に至る屈辱を背にして、国家・民族の独立はもちろんのこと、個人の自尊と独立への希望を抱いて自己形成していく。この間には、父から帰国して結婚せよと強制されたり、父が亡くなると留学資金を得るために休学して働いたり、私生活面で留学は安泰とはいえなかった<sup>(2)</sup>。しかし彼女はたくましく学び、情熱的に多くの恋をし、自分で結婚相手を選んだ。執筆面では、来日してすぐの1914年の末、東京在住の朝鮮留学生が結成する学友会の機関誌『学之光』（1914・4-1930・4、全29冊）に、新しい女性像について短いエッセイを寄稿した。そして1917年には、後年（1920）結婚することになるキム・ウヨン（金雨英）のいる京都を訪ねたりしながら小説「キョンヒ（瓊姫）」を執筆し、これを1918年3月、『学之光』の女性版として東京で創刊された『女子界』（1917・6-1920・6、5号まで）2号に発表した。その他にも多くのエッセイや小説がある。明恵英によると、同年、母校の真明女学校で教鞭をとった。翌1919年には、女性の同志と極秘裡に語らって、朝鮮史上最大規模の民衆蜂起とされる3・1独立運動に参加し、日本に対する抵抗と独立のために立ち上がった。だが逮捕され、8ヶ月間投獄された。出獄後、教職に復帰し貞信女学校に勤めた<sup>(3)</sup>が、翌年の1920年、弁護士となったキム・ウヨンと結婚し、自身は油絵の制作に専念した。

結婚生活では主導権を握っていたかに見えた彼女だったが、夫婦で欧米旅行をする機会を得た時、夫以外の男性を愛し、女性に厳酷な韓国社会の性道徳を逸脱したとされ、夫から離婚を宣告されたばかりでなく、社会からも厳しく非難された。それに負けず、彼女は絵や小説を発表し続けて自分の行動を正当化し、自分を社会に認めさせることに努めた。ついには、彼女の最もよき理解者だった兄からも背を向けられ、1948年に孤独のうちに死ぬ。その後長く、彼女の画業も文業も顧みられることはなかった。

ナ・ヘソクの生涯を概観すると、彼女の闘うべき相手は大きく二つあったことがわかる。一つはいうまでもなく朝鮮を支配する日本帝国であり、もう一つは彼女の祖国朝鮮そのものの男性中心的な社会体質だった。彼女は男性の留学生と同じように朝鮮の独立を願う人間でありながらも、後者の点で、男性と決定的に異なり、まさにそのことによって、男性と同様な人権をもつ人間として自由に生きようとし、さらにまたそのことによって後半生は悲惨を極めた。

ナ・ヘソクの名が甦るのは、死後何十年もたって、世界に広がった第二派フェミニズムとジェンダーの視点が韓国社会にも浸透し、女性の多様なセクシュアリティが容認されるようになってからのことである。ジェンダーがインターナショナルな考え方だと私が思うゆえんである。2000年になると、彼女の郷里水原市はナヘソク通りという芸術的な一大プロムナードを町の中に創設し、その建造物は、今や水原市が誇る世界遺産の水原城に次いで、市を表象する一翼にまでになっている。

冒頭から思わず回り道をしたが、本稿の課題をここで再確認し、さきに進みたい。これから私が照明を当てようとするのは、1910年代の明治の第二世代の男女が発した批評精神にあふれた言説の姿と、それらに接した韓国の留学者たちの祖国独立の言説の立ち上げを期した文化摂取の姿である。ナ・ヘソクにおいては、個人としての独立自尊の言説の組み立てが、日本と韓国の国家的な対立を超えていく言説にもなりえた点が、とりわけ注目すべき点である。

## 2 <白樺派>の磁場

### (1) 有島武郎のインターナショナリズムと韓国観

断るまでもなく、明治維新以後の日本の政治は、朝鮮半島のみならずアジアを支配する野望があらわであり、1910年になるとついに韓国を併合し、これを「朝鮮」と呼んだ。また1910年は、日本国内でも5月に大逆事件の逮捕者が出、6月に謀略者として社会主義者幸徳秋水が逮捕されたのに続いて逮捕者は続出し、年末から始まったわずか40日の審理で24人に対して死刑の判決が下ったが、うち12人は終身刑となり、幸徳秋水や菅野スガラ12人は一週間後に処刑される、といった言語道断の思想弾圧によって、国民の自由が脅かされる時代に入っていく。

ところが注目すべきことに、同じ1910年は、文学の領域に関するかぎり、若い第二世代の登場によって際だった活況期に入っているのである。4月、白樺派の拠点として『白樺』が創刊され、5月、慶応大学系の『三田文学』が、9月、谷崎潤一郎を送り出した東京帝大系の第二次『新思潮』が創刊、さらに翌1911年9月には日本初の女性同人誌『青鞥』が産声を上げ、世間の耳目を引いた。少し遅れてきた世代の芥川龍之介は、こうした先輩たちの活躍を親しく眺めたが、中でも白樺派の出現を、自然主義一色で暗く閉ざされた明治の「文壇の天窓を開け放つた」<sup>(4)</sup>と歓迎した。

だがしかし、このような明暗両面を見せる時代状況の基底では、やはり最初に述べたように、日本が着々とアジア進出の機をうかがいつつ、朝鮮王朝を潰し、ついには併合するにいたった帝国主義的ナショナリズムが、国家という大枠を通して国民の支配を着々と仕掛けていたことはまちがいない。白樺同人達は、こうした日本の韓国政策について必ずしもはっきりとした考えを残してはいないけれども、例外的に、同人間でいちばん年長だった有島武郎が、4年ほどのアメリカ留学から帰って2ヶ月余りたった頃の1907年の夏、朝鮮情勢について昂ぶりを抑えかねたような感想を、一

通の手紙と一日だけ突然書かれた日記の中に残している。

有島が韓国問題に激しく反応したのは、十分の理由がある。1907年6月には、ハーグ国際会議に韓国皇帝が密使を派遣し、国際社会に日本の不当な韓国支配を訴えようとした＜ハーグ密使事件＞が発覚している。韓国統督伊藤博文は高宗皇帝の責任を問うて譲位を迫り、7月19日に譲位させると、25日には、韓国の政治経済の中枢部を根こそぎ傀儡化した日韓新協約を強制的に締結させる。このときすでに、実質的には1910年の韓国併合は完了していたに等しい。韓国では、国民の反日感情が急速に激化して各地に暴動が起き、同時に、日本への留学生も急速に増加しはじめるのである。

このような事態を見て、1907年7月18日、韓国皇帝の譲位の前日、有島はスイス人女性マティルダ・ヘックに手紙（原文は英文）を書いた。

（前略）日本人はいまアメリカ人や朝鮮人（原文Korean people—筆者注）と大騒ぎをしています。アメリカ人の卑劣な野望を非常に疑っていて、流血の争いになっても、と公言する者もいるようです。ティルデイ、（中略）両国民（日本と朝鮮—筆者注）の間には深刻な論議などないのです。悪い連中が声を上げて、「見よ！」と言うのです。それから衝突があり、血が流れ、子を失い、孤児と未亡人が生まれるのです！

（中略）僕は心の底からこのような政治家や愛国者を憎みます。（中略）我が国と朝鮮との関係については、詳細をお話するのも恥ずかしいです。朝鮮を助けるという口実のもとに、日本はかの国を強く支配して、その内閣を傀儡にしてしまったのです。

（原文は英文。小玉晃一訳）

さらにこの手紙の8日後、新協約が成立したことを報じた1907年7月26日の新聞を読み、一日だけ日記帳を開き、いつもの英文ではなく日本語文で書いた。

韓国ハ死ニ瀕セリ。

人一介ノ虫ノ死セントスルヲ見テ之ヲ憐レムノ心アリ。一匹ノ家畜

ノ死セントスルヲ見テ之ヲ傷ムノ心アリ。一人ノ人ノ死セントスルヲ見テ之ヲ悲シムノ心アリ。一個ノ邦ノ死セントスルヲ見テハ恬然トシテ知ラザルモノ、如シ。偽善トハ此ノ如キモノヲ云フナリ。(長い中略)

我レハ不肖ト雖モ弱者ヲ压制シテ恬然タリ得ル無血漢タランニハ少シク男ラシキ心ヲ有セリ。(中略) 我レハ亦弱者ヲ压制シ盜賊ノ如ク掠奪ヲ事トスル人ヲ見タランニハ義憤ヲ發シテ彼ヲ詰責ス可キ意氣ト勇氣トヲ有セリ。独り我ガ国家ガ弱国ヲ压制シ掠奪ヲ事トスルヲ見テ平然トシテ舌ヲ二トナシ筆ヲ枉ゲテ其国家ノ為ス所ヲ讚美スルノ卑陋ナル心事ヲ有セザルナリ。

英文で書かれた手紙の読み手は、中立国スイスにいる有島の心の恋人マティルダ・ヘックである。日記の読み手は有島一人である。どちらも秘密が漏れないことが保証されたうえでの、危険な国家批判および政治的見解の告白である。有島はマティルダに言っている。戦争は、「政治家や愛国者」の根柢のない煽動によって始められる。双方の話し合いなどないまま、日本の政治家や愛国者は、相手を助けるという口実によって相手を「支配し」、やがては「傀儡」化したのだと。緊迫する対韓国関係は、日本の政治家や愛国者の策謀に踊らされた結果だととらえて、策謀した者たちへの憎しみを辛辣に吐露している。

日記の方は、朝鮮問題だけ論じて400字詰め10枚近い長さがある。留学から帰国するまでの旅の間、あれほどまめに書いていた日記が、帰国後しばらくは空白のままだが、この日のあともまた空白なのだから、この日だけは書かずにいらなかったのだろう。日本国家の韓国支配は、ヒューマニストとしての有島の正義感からすると憤激に耐えない非道な行為だという見解は、日本では危険すぎてけっして口外できない意見だが、せめて自分だけには語っておかないと収まりがつかなかったものと思われる。

1903（明治36）年に留学したアメリカで社会主義思想とその運動にふれた彼は、世界を蔽う資本主義経済の構造と世界規模で引き起こされる数々の侵略戦争との必然的な関係を理論的に理解し、インターナショナルな観

点から日韓関係を観ることができた。地球上では、アジアの国々に向かって世界主要国の覇権争いが集中し、そこに日本も負けじと参入し、韓国問題でいわば脱亜入欧を果たしたのだ、という観点を有島はとる。

もともと有島は、アジアの後発国の日本人として先進的強大国アメリカの白人社会に留学したのだが、その時すでにニューヨークは20世紀最先端の産業と文化を誇る不夜城の大都会であり、後発の日本の文明開化度とは雲泥の差だった。だが彼は、黄色人種として差別される側に立たされたことにより、アメリカをはじめとする資本主義国のナショナリズムの野望を見抜き、資本主義や人種差別や国家主義を超え、インターナショナルな見地を理想とすることになる。留学中に彼が文学を愛し、父親が期待した実業家への道を離れてしまうのも、競争と差別を原理とする近代資本主義の仕組みに同調できなかったからである。日露戦争が始まったとき、トルストイが世界に向けて発信した戦争反対のメッセージ<sup>(5)</sup>に心から共感した彼だからこそ、韓国を植民地化する日本の政治家や愛国主義者を憎み、アメリカやヨーロッパ諸国が抱くアジアへの覇権争いにも、憎悪と嫌悪が沸くばかりである。

しかし、国家の朝鮮侵略政策を批判する有島は、この一ヶ月半の後には、日本国家が国民に義務づける兵役から、どう回避策を講じても、けっきょく逃れられなかった。明晰な国家批判を抱きながら、その国家の命令に服役せざるを得なかった有島を、徴兵制のない現代から簡単に推しはかることは至難であり、安易に批判することも困難だ。

武者小路実篤や志賀直哉には、有島のようなインターナショナルな見地から日本の韓国進出をとらえた言葉はないけれども、ひとつだけ、武者小路の『或る男』(1921・7-1923・11)に兵役をめぐる興味深い場面がある。二人が親しくなって間もない頃、日露戦争が迫り(20歳頃)、志賀が、もし「戦争にとられたら」どうするかと大真面目で武者小路に質問したと、小説の九十回目はふり返っている。武者小路は「戦争にとられたら」「ゆくより仕方がない」と応え、志賀は「僕は殺される方が本当ぢやないかと

思ふ」と言ったという。この文脈では誰に殺されると言っているのかはつきりしないけれども、志賀が当時内村鑑三の所に通っていたことがすぐ後に続けて書かれていることから推読するに、汝殺すなかれのキリスト教の立場から、敵を殺すよりも自分が殺されることを選ぼうとしたと読んでみたくなる。武者小路はこの回を、戦争推進者に対する恐れと憎しみの言葉でこう締めくくっている。

彼（武者小路実篤がモデル—筆者注）は人間が、人間と殺しあふことを是認するものを恐れた。

主戦論者よ。汝等こそ真先に戦争へゆけ。

そして餓えよ、渇えよ、疲れ切れよ。目がさめたら、許してあげる。

（九十回）

日露戦争開戦のとき、アメリカにいて戦争に批判的だった有島も、いざ戦争に徴兵されたとしたら、回避を試みたはてに、「仕方がない」と言って応召し、そして戦場では敵を殺さず、「殺される方が本当ぢやないか」と悩んだのではないだろうか。それでもなお有島は白樺発刊後、『お目出度き人』（1911・2）と『桃色の室』（1911・2）を武者小路が発表すると、両方を賞賛するとともに、武者小路の視野に現実の社会が映っていないこと、とくに社会的に台頭する労働者への態度が逃げ腰であると、苦言を呈した<sup>6)</sup>。

だが、社会に対する批判は、有島の流儀が唯一正しいとはかぎらないのではないか。

## （2）武者小路実篤の「個性」等の主張から羅蕙錫へ

1960年代の後半におこった第二派フェミニズム以後、戦争や社会問題のように、個人をこえた国家や社会の次元での政治だけを政治とする考え方は見直されるようになった。それらは人間を取り巻く政治の半面にすぎないことを、第二派フェミニズムは実証し、論証もした。その思想史上の最大の功績は、政治というものが、力と力の争いを指すと定義されるな

ら、およそ人間がいる場所ならどこにでも政治は遍在し、とりわけ個人と個人の私的な恋愛、結婚、夫婦、親子などの性的な関係性が発生する場では、ジェンダーの政治が存在することを明らかにしたことである。それらの私生活の場の人間関係では、ジェンダーによる私的な政治（力関係）が、あたかも人間がもって生まれた本質的な自然であるかのように習慣化され、無意識化され、自覚されないままに生きられている。

この事実は、世界中の女性が経験した事実だったので、どこでもたやすく理解された。このような個人生活に浸透したジェンダーの政治に気づくことにより、世界中の女性たちは、ようやく個人としての自己を意識し、誰に対しても対等な個人の生涯を構想することができるようになった。韓国でナ・ヘソクが再発掘されたのも、そのような文脈でのことだった。

先述したとおり、武者小路実篤は社会や国家を直接的に語らなかったことを有島に批判されたが、じっさいには武者小路が社会や国家を意識しなかったというわけではない。武者小路実篤は、個人主義を押し立てることによって、有島とは別の形で、私生活の場を通して社会と闘う方法を選んだのだと、私は考える。彼は、どちらかというフェミニズムの発想や感性に近いように思われる。

武者小路は、『白樺』の創刊号（1910・3）に、夏目漱石への批評文『『それから』に就て』を發表し、まずは、明治第一世代の漱石に第二世代として最大の敬意を払った。だがその後で、大胆に漱石を批判した。彼は最初に、『それから』の基本構図を「社会」と「自然」の二項対立として抽出し、その「自然」の中に武者小路お得意のターム—「個性」・「自我」・「欲望」・「自己本位」などを全部投入し、漱石と自分の問題意識の親和性を強調した。その上で、漱石文学は今後、「社会」よりも「自然」に重きを置くことによって、もっと人間の未来を明るく展望してもらいたいと希望した。それは武者小路本人の「自己」の主張にはかならない。人間の価値の基盤は社会や道義という他者の言説の中にはなく、現実社会を生きる「個人」の内的な欲求、すなわち「自然」の中から生まれるという主張である。

これは、大作家漱石に向かって、新参の武者小路自身の立ち位置に移ってくるように求めたも同然である。

ここにみられるような実篤の「個人」中心の考え方は、『白樺』創刊以前に書かれた「クリンゲルの『貧窮』を見て」（1908・10・6執筆1911・4『白樺』）や、同じく『白樺』創刊以前には完成していたという小説『お目出たき人』でも明快に表明され、その後1912年11月に書き下ろし出版された小説『世間知らず』においても繰り返される。

習作「クリンゲルの『貧窮』を見て」は、武者小路が絵画論を通して対社会的態度を表明した最初であるが、若かっただけに「個性」の神聖化と「労働（者）」嫌悪をエキセントリックに吐露している。世の中には、働かなければならない人と働かなくてもよい人がいて、そのような「社会を不公平」とは思うけれども、「肉体の糧の為に労働」する「労働者の労働は神聖ではない。されば自分は労働者を尊敬しない、憐れむ」と言い切る。なぜなら、労働者Aはいつでも労働者Bと差し替えできる非「個性」的な存在だからである。公家の次男だった武者小路は、労働から無縁であることを自認し、そのような自分の存在に一点の疑念も見せていない。

労働の問題では、奇しくも漱石は『それから』の高等遊民代助に武者小路とそっくりの労働観を主張させ、三千代に、「少し胡麻化して入らつしやる様よ」と揶揄させる。この時点ではまだ武者小路のクリンゲルの「労働」をめぐる労働論は公表されていないし、漱石と武者小路の接点もまだないから、白樺派を含む高等遊民層ではこのような労働観が共有される現実があって、それを『それから』で漱石が否定したと考えられる。主人公の代助は、最後に三千代との愛を実現しようと「職業」を探しに出、普通の人間なら誰でも要求される労働問題に直面してパニックに陥るのだから。

けれども武者小路は、その結末に異を唱えた。いやしくも、自己の「自然」として代助が恋を選んだ以上、そこに暗い挫折があるとは思いたくないと。これが明治第二世代の個人主義の代表者たる武者小路の感性であり、信念でもあった。

けれども武者小路は、対有島武郎にせよ、対夏目漱石にせよ、むしろ戦略的に一つの立場を選び取ったのだと、私は考える。またそのような戦略の成功を信じさせるものが、彼の内には実感されていたにちがいない。漱石や有島のように、あれかこれかと迷う限り、人間はついに行動することができず、虚無的になるしかない。自分たちの世代は、もっと自然を信じ、虚無から立ち上がるべきだと望む武者小路は、後でふれる予定だが、彼の考えを最もまとまったかたちで『『自己の為』及び其他について』（1912・2『白樺』）で表明する。すなわち、「自己」とは多様な「欲望」の器であって、個々の人間はできるだけ欲望を満たし、「自己本位」の生き方をするのがよいのだと言い、欲望に沿わない社会的要因は軽視されてよいとする。これはこれで、個人中心主義を主張することによって、個人を規制する社会的な価値の方を相対的に低下させ、結果として社会に対する抵抗になり得るだろう。

じっさいに武者小路は、この論理を私生活での恋愛を通して生きてみせる。青鞥社初期の同人宮城ふさと恋をし、その進行中に、お互いに交換していた恋文をもとにして『世間知らず』を執筆したのだが、この時代にこれだけ大胆に一对の男女が個性と個性をぶつけ合って懸命に誘惑し合い、論議を重ねて理解を深め、周囲の反対にも怯まず、自己の判断にしたがって結婚を決定する過程を描いた恋愛小説ははじめてと言ってよく、しかも現実の生活次元でもほぼこのように恋愛が実践されたとなれば、奇跡に近い出来事だった。この小説の主人公は「お目出たい」個性を自認するが、説明するまでもなく、これはすでに『お目出たき人』を公表していた作者武者小路が、周囲の人間や社会と闘うために意図して選び取った精神の技法・武器だった。

二つの小説の主人公は「お目出たい」点において同一人物である。さらに言えば、『お目出たき人』の主人公の〈お目出たき〉を『世間知らず』の作者もまた共有しようと、意図的に決めている。『それから』の恋の結末のつけ方に不満だったのも、宮城ふさとの恋をスキャンダラスに報じて

嘲笑した新聞の三面記事<sup>(7)</sup>に動じなかったのも、自己の欲望を信じて押し抜いていく〈お目出たさ〉を、実篤がすでに思想にまで鍛えあげていたからだ。(これも後述するが、塩原心中事件の平塚明も、自己という存在のイメージを、社会を超え出していくことができる存在として鍛え上げ、そのことによって初めて起死回生を果たすことができた。)

このような闘い方は一見私的な領域にとどまるように見えようけれども、じつは社会全体の習俗や制度を、とくに性的なジェンダー面で相対化し、有島武郎とは違った意味で、インターナショナルな見地に出ていくもう一つの確実な道になり得る。時代思潮はやがて、自己の欲求を基底におく個人主義が主流となっていく。

とはいえ、このような個人主義を、そういつまでも日本の国家が野放しにしておかない。国民はそう遠くないうちに、国家が要請するナショナリズムの言説を逸脱するような個人的な思いは、何一つ言えなくさせられる時代を迎えるだろうことを、私たちの国の歴史ははっきりと教えている。

それはともかく、まさにこのような第二世代の個人主義の渦中にナ・ヘソクは降り立つのだ。ナ・ヘソクは武者小路の「個性」尊重や、多様な「欲望」の器としての「自己」のような言葉をさっそく自己形成のキーワードとして取り込み、短いエッセイ「理想的婦人」(1914・12)を書く。その辺りを武者小路のエッセイと読み比べて確かめておこう。

武者小路実篤は前に少しだけふれた「『自己の為』及び其他について」(1912・2『白樺』)の一節に言う。

しかし私は「自己」と云ふものを私以上に知つてゐる人(論争者木下空太郎を指す一筆者注)は「自己本位」になるべきはづのやうに思つております。(中略)

私は「自己」と云ふもの、内に、／個人としての欲望／社会的動物としての欲望／人間としての欲望(個人としての欲望と区別する為に私はよく人類としての欲望、或は人類の血と云つてゐるもの)／動物

としての欲望／地球としての欲望／物如としての欲望、等、のあることを信じてゐます。(中略)

私の申す自己の為に働けと申すのは之等の欲望を出来るだけ調和させ、その調和されたる欲望を出来るだけ満せと云ふことになるのです。このことは元より容易なことではありません。しかし不可能な事ではありません。(下線筆者 以下同じ)

ナ・ヘソクの「理想的婦人」は以下の通りである。

理想とは何か。

理想は欲望の思想である。すなわち感情的理想であり、いわゆる靈智的理想である。

ならば、理想的婦人として挙げられる人は誰なのか。

私は、古今を通じて理想的婦人たる婦人を知らない。それは、私がまだ、婦人の個性については十分な研究がなく理想だけが高い、ということからそう思われているかも知れない。

革新を理想としたカチューシャ、利己を理想としたマグダ、真の恋愛を理想としたノラ夫人、宗教的平等主義を理想としたストー夫人、天才を理想としたらいてう女史、円満な家庭を理想とした与謝野女史。(中略)

今日の婦人は、長い時間もっぱら男達のために尽くさせられてきた。長い間女がその温良従順主義によって養成された結果、殆ど理非の判断がつかない始末になっている。では、どうすれば各々適した女になれるのか。

それには勿論、知識と技芸が必要である。我々は、どんな事に遭っても、常識で左右を処理できなければならない。そのため一定の目的をもって、有意義に自己の個性を發揮しようとする自覚を持ち、現代を理解した思想や知識及び品性において、その時代の先覚者になって実力と権力を兼ね備えた、社交または神秘的内的光明のある理想的婦人を目指さなければならない。(「理想的婦人」1914・12『学之光』)

明恵英訳)

ナ・ヘソクの「理想は欲望の思想」だという明快な定義の背後には、「自己」や「自己の個性」といったキーワードの点在とともに、武者小路の思想が透視できる。みてきたように、武者小路は、「自己」とは多様な「欲望」の総体だと考え、できるだけ多くの欲望を実現することが、よりよく「自己」を生かすことになると言った。ナ・ヘソクはこの論理を女性の立場に置き換え、女の理想は、「自己」を生かすための「欲望」を思想化することによって実現できる、と提唱した。

もちろん「自己」を思想の基盤においたのは武者小路ばかりではない。留学生が最も身近に感じたという<sup>(8)</sup> アナーキストの大杉栄の「社会的個人主義」<sup>(9)</sup> もそうであり、ナ・ヘソクが女性の理想の要因とした「革新」や「平等」の観念は、大杉の領分に近い。さらに強調すべきは、「自己」からの出発は、平塚らいてうの「元始女性は太陽であった—青鞆発刊に際して—」の基本原則でもあった。文中の「霊智的理想」「恋愛」「天才」「神秘的内的光明」「知識」「技芸」などは、明らかに平塚らいてうの言説の領分に属する。ナ・ヘソクが世界中の理想的婦人の一人に日本人の中から選んだ平塚らいてうその人に。

『青鞆』は1911年の創刊以来、文壇を超えた広範な社会から好奇の目をもって注視され、まだ1周年にもならない1912年夏、五色の酒事件や吉原登楼事件などが「新しい女」の不良性をものがたる不祥事だとして、メディアから総攻撃された。その時、「新しい女」は、いかがわしい女を意味していたが、青鞆社同人は結束してこれを跳ね返す。1913年1、2月号の『青鞆』は、特集「新しい女、其他婦人問題に就て」を連続企画し、内容面でも、社会的な効果面でも、日本のフェミニズム史上最高峰の実績を残すことになる。

らいてうは、1月号のエッセイ「『恋愛と結婚』—エレン・ケイ著」の中に、『中央公論』の同じ1月号に載せた「新しい女」の主要部分を引用し、「自分は新しい女である。／少くとも真に新しい女でありたいと日々に願

い、日々に努めている。／（中略）／新しい女は男の利己心のために無智にされ、奴隷にされ、肉塊にされた旧い女の生活に満足しない。／新しい女は男の便宜のために造られた旧き道徳、法律を破壊しようと願っている。」と宣言し、「新しい女」の評価を逆転した。

このエッセイは、エレン・ケイの本の紹介の体裁をとりつつ、「新しい女」を宣言する形式をとっていることからわかるように、らいてうの考え方の新しいバックボーンとして、エレン・ケイが据えられていたことがわかる。ケイは、恋愛にもとづいた結婚が、社会全体の進化の必須の要件だと説いていた。引き続きらいてうは、『青鞥』の4月号で「世の婦人たちに」を発表して、さらに陣容を立て直し、国家の女子教育の理念である「良妻賢母」主義に正々堂々と抗議する。その上で、独立を目指す女性をサポートする方策として「高い教育」と「職業教育」を掲げた。この文章によってらいてうは警視庁から呼び出しを受け、しかし応じず、『円窓より』（1913・5）にこれを収めて出版し、ただちに発売禁止処分を受けた。

ナ・ヘソクは、「理想的婦人」執筆時には、使用語彙から判断して、『青鞥』の創刊の辞「元始女性は太陽であった」のほかにも、発禁で話題になった上記の「世の婦人たちに」などを読んでいと判断してよい。ナ・ヘソクは、「元始、女性は太陽であった」からは、「天才」たらんとする欲求を抱き、「自己の権利」にもとづいて「我れを支配する自主自由の人」たらんとする女性のイメージを描き、「世の婦人たちに」からは、男性の影の性役割から自立するために不可欠な「高い教育」と「職業教育」の必要に首肯し、それらのらいてうの言葉を、どんどん自分の文章に取り入れる。「恋愛」については、当時のオピニオン・リーダーの一人、エレン・ケイを、らいてうを経由して受け入れたと思われる。

このように、社会の前にまず個人がある、個人を生かせ、という思想に関する限り、〈白樺〉も無政府主義も〈青鞥〉も同じ血脈につながる兄弟姉妹のようなものだった。植民地からの女子留学生はこれらの個人主義の同時代言説にふれ、中でも同性のらいてうに最も深く自己同一化して、自

己を構築していった。

### 3 <青鞜>の磁場—平塚らいてうの宇宙的自己肯定から羅蕙錫へ

最後に、らいてうとナ・ヘソクの出会いで最も重要なのは、いかにも画家を志望したナ・ヘソクらしく、らいてうの描いた太陽のイメージに対するこだわりである。ナ・ヘソクと太陽の関係については、明惠英が文教大学大学院の修士論文に書き、それを韓国で論文化している<sup>(10)</sup>。だが私は、ナ・ヘソクが圧倒的に魅了された太陽は、明が指摘したような『青鞜』創刊号のマニフェスト「元始女性は太陽であった」の中の太陽であるよりも、むしろ、それ以前の1908年に執筆されたことが明らかな「高原の秋」の太陽の方だと思う。

らいてうは「元始女性は太陽であった」のほかにも、いくつかのエッセイで、太陽のイメージをつかって女性解放論を展開するが、「元始」の太陽は思弁的でイメージの躍動性が少し弱く、むしろ詩的な表現の面からみではるかに優れているのは「高原の秋」である。この太陽は、太陽の光がとどくかぎりの、はてしない宇宙の広がりの中に人間の心身をやわらかく解き放ち、浮遊させ、宇宙的存在として肯定するようすが、神秘的な絵のように描かれている。太陽のイメージによって自己解放を語るらいてうの卓抜さは、古今東西の文学の中でも例を見ないだろう。

ナ・ヘソクはらいてうが表象した太陽のイメージに圧倒され、ぜひとも自分の表現世界に取り込みたいと願ったにちがいない。彼女は、文学でも絵画でもイメージの表象性が、感性を通して人間を変革できることを知っていた。「理想的婦人」から4年後、彼女は小説「キョンヒ（瓊姫）」（1918）の末尾で、太陽のイメージに包まれた女性が、太陽の力で真の自己を見出し、自己に立脚して生きる力を獲得する様子を描いて、らいてうの「高原の秋」の太陽のイメージの取り込みに挑戦している。

「高原の秋」は、らいてうが森田草平との塩原心中事件<sup>(11)</sup>でスキャン

ダルにさらされ、困憊した自分を立て直すためにしばらく信州の山奥にこもった中で書かれた。起死回生を期すという言葉があるが、このときのらいてう・平塚明（はる）がそれであろう。人里離れた澄明な高原の空気を吸い、すでに禅の修行を積んでいたらいてうは「日観」の瞑想をする。太陽を心に念じつつ永劫に向かって身辺の時空を超越し、感性も思考も渾然一体となって自然・宇宙に溶け入る時、らいてうは「真の自己」に出会うという。これが「日観」である。

その一端が以下に引用する「高原の秋」のはじめの方の一節である。ここに書かれた心の機微を、ナ・ヘソクは「キョンヒ」の最も難解で問題含みとされる末尾で取り込もうとした。そう考えると、少なくとも「キョンヒ」の作者が何を表現したかったのかは、推測できるのではないだろうか。

「高原の秋」

①私は寂滅の谿間に万年雪を褥に静やかに、安らかに眠っている。

三千年の長い長いDeyachanの真昼の夜が続く。

私は真昼の夜の泉の中に浸り、浸って、飽くことも知らず、乳汁を飲んで、日に日に肥って行く。もう肥るだけ肥って、熟すだけ熟して、ひびわれるばかり——

②ふと高山性の強い光線の矢が痛いほど身を刺すかと、ぱちっと大きな眼を開いてみると、すぐ頭の上は透き通るような蒼穹だ。銀白に輝く視野の限り、卷雲の大海原は脚下に続く。③十倍大の太陽は眼の前、手にとるほどの近さである。私は射かかるといっても頸を擦り擦り自分の身体をみる、（身体をみるといっても頸を擦るような無理はしない、④私の魂は身体から離れて傍に立っているのだから）と、⑤不思議なるかな。一面、純白な羽毛で蔽われている。つくづく見れば雷鳥だ。這松の中に巣くい、⑥千古無人の境域を黙々として飛び交うかの雷鳥だ。

どうかと、まず一鼓翼して、さて大空へと飛んでみると、身体の軽さ、空虚でできているといってもまだ重い。

⑦私は太陽の周囲<sup>まわり</sup>を三度廻った。――

（「高原の秋」1908・秋執筆 1911・3『青鞥』 番号付けは筆者）

この一節は、人間界の生臭さとは無縁の、神秘と不思議に満ちているが、およそ七つの内容で構成されている。平塚明子がやがて「らいてう」を名のるゆえんもここに明かされている。

①私は劫初の時をへた自然の中に眠り、自然が刻んだ劫初の時が私の内部に浸み入り、劫初の自然によってはち切れんばかりに満たされた。（永劫の時空を吸収し、変身の機が到来）

②ふと強い光線を感じて眼を開くと、透明な蒼穹と卷雲の大海原が。（強い太陽の光が壮大な自然の空間を開く）

③すぐそばに巨大な太陽が輝いて、私は眩い。（不思議をもたらす巨大な太陽）

④私の魂が身体から遊離して、地面に横たわる私を見下ろしている。（魂の身体からの離脱）

⑤私は白い毛に蔽われ、雷鳥に変身している。（美しい自然の生きものへの同化と変身）

⑥雷鳥になった私は、千古永遠の時を黙々と飛び交う一羽の雷鳥である。（永遠の生命体としての雷鳥＝私）

⑦雷鳥になった私は、巨大な太陽の周りを三度廻った。（太陽＝雷鳥＝私、そして躍動する一体感）

つづいて「キョンヒ」の末尾の一節。そのまえに概略を述べておく。

キョンヒは、日本に留学中の女学生。休みで朝鮮の実家に帰省中である。周囲の男女は、キョンヒのように結婚もせず、に学問する女性は「新女性」だとみなして、好意をもたない。しかし、じつは彼女は学問に秀でているだけでなく、世の中が女に求める女らしさの条件もすべて備えていることを証明してみせる。日本から工場に持ち込まれた最新の縫製機械ミシンを使いこなし、使用マニュアルを作って朝鮮の女性に指導し、日本人から人望があるばかりでなく、高い報酬も受けている。家事万端にわたって女中

以上に有能であり、しかも楽しんで働くことができる。すなわち、「理想的婦人」を書いたとき、自主独立の女性の要件とした「知識と技芸」をキョンヒは兼ね備えているという次第だ。このように、キョンヒは知・技・家事・収入・生活を楽しむ能力において、何一つ欠けるものはない「理想的婦人」のはずである。彼女と直接会って話を交わした女性たちは、それまでキョンヒが「新女性」の同類だと思って抱いていた反感をすて、目の前にいるキョンヒを通して「新女性」は悪くないと見直すようになった。

こうして順風満帆な帰省と思われたところへ、突如、父親の結婚命令がくだる。縁談を断り、父の前から退出したキョンヒを、激しい不安と動揺が見舞い、ここに「理想的婦人」「新女性」を自負するキョンヒの真価が試されることになる。そしてその結末は以下のように書かれる。

しかし考えれば考えるほど彼女たち（世の中の慣習に従って生きる女性たち—筆者注）の偉さに感心し、そしてその普通なことが自分には出来ないのが不思議に思えた。あの婦人達が偉いのか自分が偉いのか、あの婦人達が人間らしいのか自分が人間らしいのか。突き詰めていくとこれがキョンヒの悩みの種だった。

「では、どうすればそれが出来るのか。ああ、難しい」

①' 瞬間、キョンヒの髪の毛がすべて逆立った。そしてキョンヒの図太い面構え、平べったい口、長い四肢の形象はいつの間にかなくなり、②' 小さめの笠の頂にちかちかと光のようなものが浮いている。部屋の中はぼかぼかした熱気に包まれた。キョンヒは思わず、四方の窓を開け放した。

③' 強い光線がいきなりドツと彼女に押し寄せてきた。その勢いはまるで、ならず者が組分けし六角の棍棒を持って、‘さあ’と、喧嘩を仕掛けたように強いものだった。（中略）

キョンヒは、眼に入ってくるものの名を次々と挙げてみる。そして横にある筆筒を触ってみる。その上に畳んである組布団も触ってみる。

「なら、わたしは何だ。そうだ、人間だ。まちがいに人間なのだ」

(中略)

キョンヒも人間だ。次に女だ。ならば、女よりもまず人間になろう。  
そして、⑥' 朝鮮の女より宇宙の中の一人の女性だ。李チヨルウォン  
と金夫人の娘である以前に、ハナニム（キリスト教の神—訳者注）の  
娘だ。形も中身も人間であることは確かだ。

④' キョンヒの背は突然船のように伸びたようだ。そして、目が顔  
全体を覆っているようだ。

そのまま突っ伏して祈禱を捧げる。

ハナニム！ ハナニムの娘がここにおります。

⑦' 父よ！ 私の生命は多くの祝福がもたらされました。

(「キョンヒ」1918・3『女子界』 明恵英訳)

「高原の秋」を構成する①から⑦までのファクターを「キョンヒ」の本文に①' から⑦' まで (⑤' はない) 照応させてみた。

ここに書かれたように、キョンヒを、結婚制度によって朝鮮の国の性習慣を強制される「朝鮮の女」から、一転して「宇宙の中の一人の女性」へと転位させたものは何か。それは、これ以上はないという苦しみの極みにおいて射してきた光であり、その光の中での <sup>メタモルフォーゼ</sup> 変身 を通しての自己発見—他の生きものや物体とは異なる「人間」であることへの気づきである。そして「人間」であることに次いで「女」なのだという、女であることの相対化が続くが、これはらいてうが繰り返し主張した、女である前に人間だ、という基本原則である。さらに「朝鮮」の女であるよりも「宇宙」に属する女だというパラダイムの組み替えは、らいてうばかりでなく、白樺的な感性によるナショナリズムの超え方にほかならなかった。

宇宙的女性観への到達を、キョンヒはハナニム（神）への祈りの中で「祝福」と呼ぶが、これは雷鳥に化身して太陽の周りを飛ぶ「高原の秋」の「私」の喜びに等しい。この突然のハナニムの出現は、コンテクストになじまないとする批判的な読み方もあるだろうが、キョンヒがハナニムに加護を祈

るくだりは、宇宙的女性観を体感して、朝鮮文化に縛られたナショナルなジェンダーを棄却した喜びを抱き留めてくれる大きな存在が求められたものと、読むことができよう。ただし④' はちょっと理解しにくい。おそらくこれは、「高原の秋」で身体から魂が離脱し、身体をく見る〉位置についたもう一人の私の視点を描こうと試みたのだと思われる。

全体的にこの終結部は、それまでの闊達な生活感覚にあふれたリアリスティックな表現とはうってかわって、象徴的な表現を目指してはいるのだが、たしかにそれは、平塚らいてうの「高原の秋」の詩的世界をモデルにするなら必須の表現技法であるけれども、「キョンヒ」の末尾には、その願いのみが露わになって、残念ながら、表現の実験は作者が期待したほどには成功していない。

#### おわりに

1914年に朝鮮から留学したナ・ヘソクのエッセイと小説を通して、1910年代の日韓の政治状況と文化状況の交点に照明を当てることを試みた。1910年代は、明治国家主義を推進した明治第一世代に抗して、個人の価値に立脚して世界をとらえようとする第二世代の言説、〈白樺〉〈青鞥〉アナキズムの個人主義の思想が主流化した。有島武郎の韓国観を支えるインターナショナリズムはアメリカ留学と社会主義の研究を通して獲得されたが、一見、インターナショナルな視点をもたなかったかに見える明治第二世代においても、じつは、明治第一世代が囚われた国家意識を離れ、国家と個人を関係を革命的に逆転させて見せた挑戦性を評価すべきであろう。ジェンダー研究の立場からとくにそう思う。

他方、ナ・ヘソクの自己形成は、留学時代がこのような明治第二世代の言説の渦中にあったことを離れては果たせなかったものである。とりわけ〈青鞥〉の平塚らいてうの自己形成において特異な役割を果たした太陽の表象は、ナ・ヘソクが画家であっただけに、朝鮮の女性が自己形成する決

定的な瞬間を表現するために、ぜひ取り込みたいモデルだったにちがいない。ただ「キョンヒ」の末尾に関するかぎり、モデルとの関係が露わな分、ナ・ヘソクには構想が練り上げられるまでの時間がもう少し必要だったようだ。

けれども、最も重要な点は、これら武者小路や大杉やらいてうの言葉の力を必要としたのは、ナ・ヘソクその人の現実的な「自己」であり「個性」だったということである。朝鮮からの留学生にとって、朝鮮を支配する日本という国家は、彼らがインターナショナルな世界人となって日本を超え、母国朝鮮をも超えるための触媒の場だった考えられる。

人は、「自己」の充実を基盤にして思想を立ち上げようとするとき、国とジェンダーを超えることができる。ナ・ヘソクという言葉を通して私たちはそのことを理解する。

#### 注

- (1) 任展慧『日本における朝鮮人の文学の歴史—1945年まで—』（1994法政大学出版局）p54。注7のナ・ヨンギョン著『日帝時代、わが家は』によると、そのころの留学生数は600人だという。
- (2) 明恵英、2003年度文教大学言語文化研究科修士論文「宮本百合子と羅蕙錫<sup>ナ・ヘソク</sup>の比較研究—「生命」「エロス」「ジェンダー」をめぐって—」、および同題の論文（韓国の学会誌『日本語文学』第2輯 2004・12）
- (3) 注2に同じ。
- (4) 芥川龍之介「あの頃の自分の事」（『中央公論』1919・1）
- (5) トルストイ、1904年6月27日の『タイムズ』（ロンドン）に非戦論を発表。同年8月7日週刊『平民新聞』（東京）に「トルストイ翁の日露戦争論」として、幸徳秋水・堺利彦が訳載。
- (6) 有島は「『お目出度人』を読みて」（『白樺』1912・4）を書いて、もっと社会と向き合うように武者小路に要望した。
- (7) 「若殿恋の俘 男は初心な白樺文士 女は青鞥社不良首魁」（1912・12・12『東京毎夕新聞』）、「青鞥の女と白樺の男」（1912・12・13『やまと新聞』）
- (8) ナ・ヨンギョン（ナ・ヘソクの姪）が書いた父ナ・ギョンスク（ナ・ヘソクの兄）の伝記『日帝時代、わが家は』（2003・2 みすず書房）は、兄妹が留学していた明治末から大正期にかけて、朝鮮の留学生は大杉栄に最も信頼を置いて接近したと書いている。
- (9) 大杉栄『社会的個人主義』（1915・11 新潮社）は「自序」に言う。社会的個人

1910年代の日韓文学の交点—〈白樺〉・〈青鞥〉と羅蕙錫—

主義の趣意は「各個人の個性の多種多様な自由な発達が、社会組織の第一条件であり、社会進化の第一要素であるべきことを主張する」ことにあると。

(10) 注2に同じ。

(11) 1908年3月24日、平塚明と作家森田草平は塩原で不可解な心中行を起こし、雪の山中で発見され、各新聞により大スキャンダルとして取り上げられた。平塚明は信州にこもり、森田は夏日漱石の推薦により、明との交際の経緯を『煤煙』と題して『朝日新聞』（1909・1・1～5・16）に連載した。

引用文は次のものを底本とした。

筑摩書房版『有島武郎全集』

小学館版『武者小路実篤全集』

大月書店版『平塚らいてう著作集』

明恵英によるナ・ヘソクの和文訳（2003年度文教大学修士論文）

岩波書店版『夏日漱石全集』（1994）